

演題16. 左側陳旧性関節突起骨折に行った関節鏡視下剥離授動術の1例

○大平 明範, 村田 尚子, 星 秀樹  
杉山 芳樹, 関山 三郎

岩手医科大学歯学部口腔外科学第二講座

今回われわれは、左側陳旧性関節突起骨折に対し、関節鏡視下剥離授動術を行った1例を経験したので報告した。

対象は56歳の男性で、左側顎関節の疼痛を主訴に平成11年6月15日に当科を受診した。現病歴は、平成11年5月8日、船上での作業中に氷を入れる甕が頭上に落下し受傷。某病院に搬送され、オトガイ部の止血縫合処置を受ける。その後、近病院の外科転院となり、受傷の際に義歯の破損を生じたため、同病院歯科受診。新義歯の作製を行ったが、左側顎関節痛と開口障害の改善を得なかったため当科紹介となる。初診時の開口域は27mmで、左側顎関節に疼痛を認めた。CT所見では、小骨片の前内側への偏位を認めたが、側頭骨との癒着などはなかった。MRI所見では、関節円板の形態には異常がなかったが、下顎頭の滑走はごくわずかであった。上関節腔パンピングでは、関節腔の拡張は少なく、容積は0.5mlと狭小化を示した。これらのことから、上関節腔癒着または線維性強直症と診断し、平成11年7月2日全麻下にて関節鏡視下剥離授動術を施行した。関節鏡視所見では、広範囲に滑膜炎や凝血塊がみられ、更に、線維性癒着や線維化がみられた。また、関節結節後斜面は、軟骨剥離がみられ軟骨下骨は露出していた。前方腔は線維化を認め、狭小化していた。

術式は、複数穿刺で線維化し狭小化した前方腔の拡張と線維性癒着の剥離と洗浄を行い関節の授動を計った。現在、術後5か月であるが、開口域は40mmに改善され関節痛の消失を得た。

演題17. 習慣性顎関節脱臼に対し行った関節鏡視下手術の3例

○大平 明範, 村田 尚子, 北畠 顕良  
佐藤 理恵, 星 秀樹, 杉山 芳樹  
関山 三郎

岩手医科大学歯学部口腔外科学第二講座

当科では、自己整復困難または不可能な習慣性顎関節脱臼のうち、各種保存療法に奏功しない例について観血的治療を選択している。観血的な療法としては、下顎頭の運動抑制法、下顎頭の運動平滑化法、咀嚼筋の再調整法に大別されている。われわれは、下顎頭の運動抑制法に分類されるであろう方法を鏡視下で行い良好な結果を得たので報告した。対象は、1998年8月から1999年8月までに関節鏡視下に本法を行った男性1例（1関節）、女性2例（2関節）で、平均年齢は38.3歳（16～74歳）であった。術式は、大西らの方法に従い、KTPレーザーまたはNd-YAGレーザーを使用し円板後部組織の切除、蒸散により新鮮面を形成し、ナイロン糸を用い、円板を後方に牽引し縫合固定した。関節隆起前方斜面角と下顎窩陥凹度を岩佐らの方法に準じ計測した結果、左右差はみられなかった。鏡視所見では、閉口時、円板後方肥厚部は下顎窩内に押し出され、閉口障害を生じていた。術後の画像所見では、下顎頭の前滑走は制限されていた。術前と比較し開口域の減少を認めたのは1例のみであった。経過観察期間は、最短5か月から最長1年3か月で再発なく経過良好である。